

正岡子規と赤木格堂

―「平賀元義発見譚」解説―

柴田 奈美

要約

赤木格堂は子規晩年の弟子で、平賀元義を紹介した人物として有名であるが、格堂自身に関する研究はほとんどなされていない。本稿では、資料として一般には入手し難い「平賀元義発見譚」の全文を掲げて解説を施すとともに、記述の誤りや新しい発見について指摘した。

キーワード 格堂・子規・平賀元義・新免一五坊

はじめに

赤木格堂は、正岡子規に平賀元義を紹介し、子規の短歌革新に影響を与えた人物として有名である。

平賀元義発見の経緯については、「國文學」(平成十六年三月号)の「特集 正岡子規・やわらかな思想」の中で、格堂の執筆した「先師の晩年」(「日本及日本人」昭和三年九月)と「平賀元義発見譚(一)」「(二)」「(三)」「(吉備びと)」昭和三年十月、十一月を資料として詳述した。

本稿では、資料として一般には入手が困難な「平賀元義発見譚」の全文を掲げ、その解説を行うとともに、記述の誤りや新しい発見について指摘する。

平賀元義発見譚(一)

一昨年或人から、羽生永明氏(注1)編の元義歌集を贈られたが、一覽して其儘書架に蔵めた。近頃小閑を得、始めて全部を通読した。巻尾の年譜を読んで行くと、終り頃の所に、明治三十二年冬、羽生の筆になれる「戀の平賀元義」山陽新報紙上に掲載せらる。明治三十四年二月十四日、兒島の人赤城格堂「戀の平賀元義」及び元義の歌二百数十首を一括して、之を正岡子規に示す。子規始めて元義あるを知り、大に之を推奨して、萬葉以来唯一の歌人なりとし、之を「墨汁一滴」の中に書して、日本新聞に掲載す、とある。大体は其通りであるが、三十四年二月とあるは、三十三年の八月であつた事を編者が知られなかつた為と思ふ。又翌年の二月十四日より始めて、子規先生の「墨汁一滴」中に書かれるに至る迄の筋道も、御存じなかつたものと思ふ。当時の事に就き、今に至る迄、屢ば人々から色々と尋ねられる。一々答ふる煩を避け、爰に大袈裟かも知らぬが、発見譚と題して、当時の思ひ出を書くことにした。

羽生氏が書かれて居る通り、勿論私は兒島の人である。小串村の産である。併し同氏の書かれ振りを見て、私が其頃小串へ

久しく在住して居たかの如く、想像してゐる人が多い。實際私は明治二十六年の春(注2)から、郷里を離れて、同三十六年夏迄まる十ヶ年間、学生々活を続けて居たのである。正岡子規先生の根岸の短歌会には、始めから参加し(注3)、革新の急先鋒として、其側に従学して居た(注4)。而かして明治三十三年は、吾が根岸短歌会の黄金時代とも云ふべき、最高潮期であつた(注5)。同志も多くなり、作歌も多くなり、選歌の標準も俄かに上り、傍ら萬葉集の研究(注6)も、随分盛にやつた。萬葉以来、何故に眞の歌人が出なかつたであらうか。実に概かほしい。せめて二人や三人は、何処かに隠れて居りさうなものだと、仲間の者は皆鶴の目鷹の目で、古来の歌集を、あさり廻つたものである。子規先生の筆にて発表された、源実朝、橘曙覧、田安宗武、丸山作楽、僧良寛などが、其の掘り出しものであつたが、其中で田安宗武が、比較的萬葉の神髓を得て居る位(注7)で、其他は大したものでもない。もう斯んなものであらうか、さりとほ余り情けない、と先生は嘆声を洩らして居られた。丁度其頃学校も暑中休暇となつたから、私は久しぶりに帰省したくなり、又其帰途富士に登つて歌を詠まうと考へて居た。所が急に要事が出来て、富士に登らず、俄かに帰郷せねばならぬことになつた。先生を訪うて此事を話すと、其では一つ送別の歌を作らうと言ひ出され、「富士に登らずして帰る格堂を送る」と題して、長歌を作られ(注8)、伊藤左千夫も亦長歌を作り、

自分も長歌で答へ、御馳走を戴いて別れた。

帰郷して三四日経つと、根岸短歌会の同人で、当時美作へ帰郷して居た新免一王坊(注9)(此人は今の新免少将の弟で、歯科医修行中であつた)から端書を寄せ、此年の一月頃の山陽新報へ、「戀の平賀元義」といふ続き物が出たが、其歌が萬葉調である、一つ御覧になつてはどうか、と云うて来た。半年以上も経つた新聞は何処にもない。遂に村役場へ行つて、古新聞を繰

返し「戀の平賀元義」を見出した。成る程之は偉いと一読三嘆の後、村長の許可を得て、早速切抜をさして貰つた。余り古い人でもないから、祖父など多分知つて居るだらうと、直ぐ祖父に訊くと、猫彦先生のことなら知つて居るといはれて、色々話され、其遺墨も出して見せられた。若し其歌を集めて見る積りなら、是れ〳〵の方法を取れと教へられた。私は愈しめたと、嬉しくて溜らない。早速切抜を封筒に入れて、子規先生へ送り、「どうです、驚いたでせう、遺詠は大分あるらしいから、明日から一生懸命に集めます。早く新聞で発表して下さい。さうすれば歌を探しやすいから」と手紙を出した。其翌日から、折柄の降雨をも物ともせず、村内より始めて、隣村の親戚や、知人を便りに、探し廻り、手当り次第に手帳に写し取つた。今日では元義のものといへば、大した珍品になつたけれども、当時は誰も問題にせず、張り交ぜの中にもあれば台所の襖にもあり、柱懸もあれば、扇面もあり、母の生家などには、三十枚余りも、一纏めにしてあつた。お蔭で余り骨を折らずして、一挙に百数十首も集録し得た。子規先生の処へ、私の手紙の着いた時は、丁度其前日俳句会を開かれ、其あと夜半過まで鳴雪翁と大激論をせられ、非常に疲れられたが、果然翌朝啞血され、大に弱つて居られた所であつた。私の手紙を見て、大に驚かれ又大に喜ばれ、

血を吐きし病の床のつれづれに元義の歌読めばうれしも

上にして田安宗武下にして平賀元義歌よみ二人

と詠ぜられ、是非新聞へ出すから、骨折つて歌を集めよと、激励して来られた(注10)。

此時ふと考へた。羽生氏は岡直盧翁(注11)から歌集を借覧せられたやうであるが、「戀の元義」中に引用して居る以外に、まだ〳〵秀歌が沢山あるかも知れぬ。一つ同翁の集録を見たいものだと。直盧翁は拙宅へ二三度来られた事もあるし、自分に

だつて借して貰へると思ひ、早速出岡して神宮奉齋会に森津翁を訪うたが、翁は元義のことに就き、少しも知られなかつた。翁の紹介状を貰うて、岡翁を訪ねたら、直ちに二階から小さな集録を出して下さつた。色々元義に就いて訊いたけれども、格別の事も話されず、今時斯んなものを写して、何にするのかと、いつたやうな顔付であつた。此本を借ると急いで帰り、此時迄自分で集録したものと、較べて見ると、新らしき獲物が中々沢山ある。羽生氏が引用せる歌は、ほんの、戀に関する一部分で、歌としては捨て難い傑作が、ざらにあつた。兎も角急いで写し取り、余り延引してはいけなと思ひ、三日目には、直廬翁へ、返璧した。其れからは、近村の神官や老人を歴訪して、元義に関する伝説遺聞を聞き集めた。一体此辺には、元義に限らず、国学者がよく来たもので、野々口隆正や、足代引訓、近くは上田及淵、など来講したものである。私の幼時にも、伊吹秀頼翁や川崎多豆雄翁、三甘政和翁など、度び／＼来宅されて国典の講義をせられた。其んな訳で、元義の事も案外にやす／＼と知ることが出来た。其外に元義の遺墨も、短冊、扇面、半折は十枚程手に入つた。(未完)

注

(1) 永明は明治元年(一八六八)九月一日、飯田堀家藩家臣羽生鈴五郎(羽生家第四代)の長男として飯田に生まれた。幼名を芳太郎といい、字は子英、東洋と号した。明治十六年、下伊那中学校を卒業、しばらく群馬県や東京府下の小学校に勤めた後、長野県尋常師範学校、次いで国学院本科に入学し、二十六年、同選科を卒業した。岩手県尋常師範学校に助教諭として奉職した後、明治二十九年六月、岡山県岡山尋常中学校教諭に就任、校務の傍ら井上通泰らの主宰する吉備史談会に加わり、平賀元義の研究を始める。明治三十四年三月、長

野県飯田中学校に転出したが、三十九年四月、再び岡山に赴いて、私立金川中学校に勤め、四十年四月以降は岡山県西大寺高等女学校教諭を兼務した。(中略)稿本『平賀元義伝』六巻は、この二度目の岡山在任期間にほぼ脱稿したものという。明治四十二年三月、名を永明と改め、同年八月からは岡山県神職会国典講師にも任じられたが、四十四年四月、上京して青山学院教授となり、渋谷区氷川町五十三番地(現、渋谷区東二丁目一四―二七)に居を定める。以後、青山学院には他界するまで約二十年間奉職した。その間、明治神宮奉賛会囑託や、皇典講究所神職養成部教授を勤めたこともあつたが、昭和五年七月十一日、数え年六十三歳で病歿した。墓所は千住不動院(足立区千住一―二、古義真言宗)にある。その生前に刊行をみた著書には『註解平賀元義歌集』(大正十四年、古今書院刊)がある。(羽生永明『平賀元義』山陽新聞社 昭和六十一年四月、「解説」九三二頁―九三三頁 参照)

(2) 実際には明治二十九年六月に上京し、国民英学校に臨時入学。九月に早稲田専門学校英語専修に入学。

(3) 実際には明治三十二年九月三日に行われた、第三回目の根岸子規庵歌会歌稿に初めて名前が見える。「先師の晩年」には「この三回目の九月から出席しました」とある。

(4) 「第三回募集短歌に就きて」(『日本』明治三十三年四月三十日)には、「選抜の比例の多き者を挙げれば岡麓氏(東京)の歌三十首にして十六首を抜ける、葯房氏(東京)の歌二十六首にして十四首を抜ける、格堂氏(東京)の歌三十首にして十五首を抜けるが如き其最なる者なり。」と、その安定した作歌力を評価し、さらに作風については、次のように述べている。

「格堂氏の歌、初め放膽に失し今小心に返る、初め複雑に

過ぎ今簡單を尚ぶ。善く模し善く変ず。縦横馳驅疲る、事を知らず、兵の精なる者なり。然れども善く模する者は初に進む事早くして後に進む事遅し。宜しく立脚地を定めて自己の特色を發揮するに務むべきなり」(『子規全集 第七卷』四五四頁)

急速に力量を高めた格堂は、「国力」の選者となって活躍するのである。因みに子規の格堂宛書簡(明治三十三年六月十二日)には、次の二首が記されている。

国力ノ歌ヲ事ニ就キ話アリ学校學課ヒマナ時ニ来
国力ニ歌ヲ出ストテオノガ歌バカリナ出ダシ歌ハヨクトモ

(『子規全集 第十九卷』五一七頁)
また、「俳星」(明治三十三年八月 六号)には、「国力」の選者は、俳句・短歌共格堂とある(二九頁)。

「革新の急先鋒として」という表現には、早くからその實力を子規に認められ、子規の目指す短歌の革新の一翼を担っていたという自負が感じられるが、以上のことから、実際に相当の活躍をしていたことが明らかである。

(5) この点については、「先師の晩年」に次のように詳述している。

「会を重ねる毎に陣容も整ひ、進境も著るしく、遂に其年(明治三十二年のこと 柴田注)の暮には、新聞で広く『新年雑誌』を募集して、之を翌三十三年の新年紙上に発表し一挙にして国内各地の新進歌人を糾合す、といった勢を示しました」「一回は一回と、応募者も増し、従つて入選の秀歌も多くなり、暮年ならずして、歌壇の一方に居然たる一敵国の觀をなすに至りました」「三十三年になると、長塚節、西田巴子、安江不空、森田義郎、蔵真などが加はり来り、同勢どつと賑かになりました。先生が病床を出で、本所に左千夫を訪ねられしは、其年の五月でした。岡麓邸の園遊歌会に列せ

られたのも、同じ年の六月でした。私が暑中休暇の帰省中に、平賀元義を発見して、先生を驚喜せしめたのも同じ年の八月でした。明治三十三年は、実に根岸短歌会の黄金時代でした。研究創作共に最高潮期でありました」(十二―十三頁)

(6) 第一回の萬葉輪講会は、明治三十三年四月十五日に開かれた。会者は、子規・秀真・左千夫・一五坊・茂春・不可得・格堂・三子(『子規全集 第二十二卷』四二七頁)。

(7) 子規は「日本」(明治三十二年八月三十一日)の「歌話(十一)」の中で、「萬葉以後の歌人は源実朝と田安宗武との二人なり」「実朝の定家を師とし宗武の真淵を師とする、皆当時の碩学宗匠にして且つ後世に名を伝へ一流の祖といはる、程の人なり。然れども実朝は定家の彫琢に倣はず宗武は真淵の平凡に堕ちず、共に師承の外に於て屹然として一家を成す」(『子規全集 第七卷』一八五頁)と述べ、実朝と対等に宗武を評価している。

また、明治三十四年二月二十六日の「墨汁一滴」の中でも「萬葉以後に於いて歌人四人を得たり。源実朝、徳川宗武、井手曙覧、平賀元義是なり」(『子規全集 第十一卷』一一〇頁)と他の歌人と同等に評価している。

本文中の「田安宗武が、比較的萬葉の神髓を得て居る位で、其他は大したものでもない」という評価は、格堂のものであり、子規の評価ではないのではないか。少なくとも公にされた論文の中では、他の歌人と同等に評価している。

(8) 「竹の里人」の筆名で、次のような長歌と反歌を作っている。

駿河なる富士の高嶺に、のぼりたち峰の八尾踏み、岩陰に残れる雪を、神わざとくゑはららかし、其雪の吹雪となりて、ひんがしの都をおほひ、暑き日に病みてなやめる、我庵にふりもくるかと、今日も待ち明日も待たんを、其山に

登りても見ず、たらちねの母の国へと、ひた走るかも
富士のねに咲ける薔を吉備にある親に見せんと君思はずや

〔子規全集 第七卷〕四七八頁

(9) 「一五坊」は「一五坊」の誤り。一五坊は吉野郡大野村（現、岡山県英田郡大原町）に、明治十二年に生まれた。格堂と同年齢。十三歳で上京し、十九歳（明治三十一年）で初めて子規を根岸に訪う。格堂と同じく、第三回目の歌会から名前が見える。明治三十二年の蕪村忌、同三十三年六月の岡麓園遊歌会にも格堂と共に出席している。同年齢、同郷ということ、二人は気安く交流していたと推測される。

明治三十三年頃の「一五坊」は齒科医を志して東京の長井医院に書生として住み込んでいた。たまたま一月と八月に帰省していたため、山陽新報に発表された「恋の平賀元義」を目にする機会を得たのである。夏に格堂が帰省したと知って、元義のことを思い出し、葉書を送ったものである。六月の園遊歌会には二人とも出席していたので、格堂や子規にはその時に伝えることもできたはずであるし、記事を切り抜いておくことも可能であった。しかし、一五坊はそれをしなかった。少し気にかかっていたことを帰郷して思い出し、格堂に軽い気持ちで伝えたものと推察される。

(10) 明治三十二年八月十日付け、赤木亀一宛ての子規の書簡は次のとおり。

「昨日俳句会、昨夜々半迄原稿書ク 今朝咯血、疲労ハアレ
ド却テ心地ヨクナリタリ、病牀ニ君ノ手紙ヲ読ム 元義ノ
歌ハ不思議ノコト也 骨折リテ其歌ヲ集メ玉ヘ 是非新聞
ニ出シタシ

上ニシテ田安宗武下ニシテ平賀元義歌ヨミ二人
血ヲハキシ病ノ床ノツレ、ニ元義ノ歌ヨメバウレシモ」

〔子規全集 第十九卷〕五四一頁

平賀元義の歌を知った子規の喜びが、いかに大きかったかが窺われる書簡である。

また、子規の評価を確信していた格堂の鑑賞眼も確かなものであったことが指摘できる。

さらに、(注7)において問題にした、田安宗武の評価についてであるが、「上ニシテ田安宗武」とあることから、子規の内輪の会においては、元義を知る前には宗武を他の歌人と比較して、最上位に評価していたとも考えられる。

(11) 羽生永明に元義の存在を教えた人物。幼時、元義に就いて学んだことのある歌人・国学者である。

廬翁は弘化四年七月二十八日、酒折宮（現岡山神社）の宮司の長男として生まれた。

幼少のころから、文と武の習得にはげんだ。酒折宮の社務をはじめ安仁神社権禰宜、吉備津神社主典、黒住教権少教正などの神職にたずさわっていたが、明治二十一年四十二歳の時から、教職に身を投じ、岡山中学、岡山高女、山陽高女の教諭を歴任した。明治三十九年、六十歳になったので教師をやめて、後進に和歌を指導することに専念した。岡山地方の旧派和歌の大御所であって、その門人は全国にわたって千余人に及んだという。たまたま、岡山医学校眼科部の教授として岡山にいた井上通泰と相識って、その門人となった。通泰主宰の「吉備史談会」の有力メンバーであった。

昭和八年四月二十二日、数え年八十七で病歿した。岡山市が生んだ、昔流にいう国学者の最後の人といえる。

（羽生永明『平賀元義』山陽新聞社 昭和六十一年四月 工藤進思郎「解説」九二二頁参照、湯本喜作『平賀元義研究』角川書店 昭和四十一年十一月 二五三～二五四頁参照）

平賀元義発見譚（二）

私の帰郷以来、二十日程は斯うして過ごし、愈九月に入つて、一切の材料を携へ上京した。私はアメリカを発見したコロンブスの様な、誇を以て、直ちに根岸の草廬を訪ねた。先生は西班牙の如き喜びを以て、私を歓迎された。其時短冊懸に、他の短冊を外づして挟まれた元義の「吾妹児と別れて行けば肩引の横山の上に月ぞ残れる」の短冊は、先生の死後迄も簗笠と同様に、病室の柱に残つたもの、一つであつた。其れからといふものは、根岸へ行くもの、間に、平賀元義は唯一とは云はぬが、最大なる話題となり、私は新大陸発見者に向つて、珍奇な事物を聞きながら、元義の事を、人々から尋ねられ、自分でも得意になつて、話をしたり、墨蹟を示したりした。其話の一部が、森田義郎に筆記されて、麗々と「心の華」といふ佐々木信綱氏の雑誌に、掲載された。今では五月蠅い位だが、其頃は自分の談話が筆記されて、公表された最初であつたから、無闇に嬉しく、其雑誌を二冊も買つて、祖父へ送つたりしたものであつた。中には、私の集録した元義歌集を、写さして呉れといふものもあり、半折を一枚割愛せよといふ、欲張り連も来り、私は隅に置けない人間になつて、一時大得意であつた。

所が一方子規先生は、十月頃から病勢一進、衰弱意外に甚だしく、迎も纏まつた文章は書けなくなつた。私は行く度びに元義の評論起稿を促すけれども、今に〜と答へられつゝ、病勢がよくならない。先生は前年春に、曙覧を評論された（注一）如く、随分長い纏まつた文章を、書かれる積りであつたから、一寸着手によだゝれたのである。無理に促せば「其んなら君書き玉へ、新聞へは僕が載させるから」と言はれる。「是非先生の筆を借つて、発表したくて、今迄待つて居ましたのです、今更遁げられては困ります」と立腹しました。が病氣には勝てぬと降

参した。遂に延び〜て、愈翌三十四年になつたが、先生の病氣は、益々よくなる。此状態では、迎も長篇の執筆は、不可能となつた。事爰に窮まつて、一の名案が浮んだ。其れは一日に少しづつ、でも、何か新聞に書くといふので、「墨汁一滴」が日本紙上に現はるゝに至つたのが、一月二十日である。毎日何かしら少しづつ、書くといふ、一つの文責が病師の肩上加つた以上、此上別に纏まつた長篇を起草することは、絶対に不可能であると、私は直覺したから、今度は寸法を一変して、先生へせがみ、「毎日少しづつ、小切りにしても宜しいから、墨汁一滴で、元義を評論して下さい」とねだり、それならといふことで、愈二月十四日より始めて、平賀元義が、日本新聞に紹介されることになつたのである（注二）。私のアメリカ発見は、五ヶ月後に、始めて世に公にされた訳である。別段腐る物ではないが、酷暑も恐れず、風雨をも厭はず、一生懸命に蒐集したものを、半歳も鐘詰にされては私も聊か焦心せざるを得ないではないか。愈々新聞に出た時の嬉しさは、後年代議士の当選証書を受け取つた時（注三）よりも、遙かに嬉しかった。平賀元義其人が、広い世の中へ浮び出たよりも、私自身が浮び出た様に、胸が広くなつた。一日一滴、滴々積もりて、二十六日に至り、やつと完結した。始めの経画は、橘曙覧を論じた如くに、雄大なる一長篇となる筈であつたのが、不幸先生の衰弱に累せられ、極めて短い、而かも兎糞的、断片的随筆の、書き集めといふ様なものになつて仕舞つたのは、実に残念であつたが、致し方がない（注四）。

平賀元義が萬葉以来の随一歌人として、世に現はれた経路は、正に斯くの如き始末であつた。其後「心の華」誌上へ、私の集録を森田義郎の名で掲載し（注五）、次で今のアラ、ギ派の歌人岡麓の経営して居た、彩雲閣といふ書店より、矢張り森田義郎の編者名義で、単行の歌集を公にした。

今羽生氏の元義年譜を読むと、私は赤木と申す姓を赤城と誤まられて居るのみならず、元義の歌集と新聞の切り抜を兎島から正岡子規へ郵送した、ほんの取次役を勤めたのみのやうに書いてある。別に不満とも思はないが、一層明瞭に、其間の経緯を書いて、当時の真相を伝えたいと思ひ、此稿を起したのである(注6)。

羽生氏は、此元義歌集に公するに当り、アラ、ギ派の耆宿久保田俊彦氏の勸説による、と書かれて居るが、其久保田氏は、吾亡友伊藤左千夫の門人にして、左千夫の遺業アラ、ギを嗣いだものである。即ち子規先生の孫弟子に当る者である。左様な因縁で、完全なる元義歌集が出来たことを知り、私は此上なく嬉しく、又なつかしく思ふ。だから、尚更此一文を書く氣になつた。

元義の歌を、兎も角百余首も集録された、岡直廬翁がありたればこそ、羽生氏の「戀の元義」が書かれたのである。「戀の元義」中に萬葉調の歌が引用されたればこそ、美作の新免一五坊が、目に留まつたのである。コロンブスが、亜米利加を発見した事になつて居るが、コロンブス以前に、亜米利加を発見した人があつたといふのは確実らしい。歌人としての平賀元義の発見には、今日迄、人の知らない新免一五坊の、あつた事を、こゝに特筆して置きたい(注7)。

注

- (1) 子規は「曙覧の歌」と題し、明治三十三年三月二十二日から同年四月二十三日まで、九回にわたつて新聞「日本」に連載した。その中で、「識見高邁、凡俗に超越する所あるを見る」と大きく評価していた(『子規全集 第七卷』一三五頁)。
- (2) 子規が平賀元義の評論を執筆するに至つた経緯については、「先師の晩年」にも次のように詳述してある。

「私が平賀元義の歌を集めて、先生の評論発表を願つたのは、前年の八月であつたのに、病重くなりて中々筆を執られない。強ひて促せば「君自身で書け、新聞へは僕が載させるから」と逃げられる。遂に其儘延びに延びて、其年も暮れました。先生の病氣は次第に悪く、最早纏まつた長篇を書かれる精力もなく、又将来の見込も立たなくなつた揚句に、毎日何でも少しづつ、書くといふ好案が浮んで来て、三十四年の一月から「墨汁一滴」が、日本紙上に現はるゝ様になつたのです。此墨汁一滴が出か、つたから、私は早速根岸へ出かけて、先生に訴へ、半年も延引になつて居る元義論をば、此際毎日小切りにして、さも宜しいから、是非墨汁一滴欄で発表して下さいと強請つた結果「其れならば」と諾なはれて、愈々二月十五日より(実際は二月十四日より 柴田注)初めて、元義論に筆を染められ、逐日滴々、二十六日に至りて完結し、私も積もる思ひを達して安心しました。之は世間に誤伝されて居るから、特筆大書して置きます(十四頁)

- (3) 大正六年に念願の代議士となつたが、大正九年に議會解散後は議政壇上に立つことはなかつた(塩尻青筋・島津青沙『岡山の俳句』岡山文庫 昭和四十五年十一月 一―三頁)。
- (4) 子規の衰弱した様態のため、元義論は「極めて短い」「断片的随筆の、書き集めといふ様なもの」となつてしまつたことを格堂は残念がつているが、子規のこの元義論は、その後の元義研究のための貴重な先行研究となり得ている。

子規が墨汁一滴のように述べているとおり、「萬葉以来唯一の歌人」としての元義評価の嚆矢である。

「忘れんとする時平賀元義なる名は昨年の夏羽生某によりて岡山の新聞紙上に現されぬ。しかれども此時世に紹介せられしは「戀の平賀元義」なる題号の下に奇矯なる歌人、潔癖ある国学者、戀の奴隷としての平賀元義にして、萬葉以来

唯一の歌人としての平賀元義には非りき」〔日本〕二月十五日

歌壇史から消え去ろうとしていた元義を再び世に出したの
は羽生永明ではあったが、その取り挙げ方は歌そのものの評
価ではなかった。その萬葉調を体得した歌の文芸云性を見抜き、
高く評価して世に初めて紹介するのは子規自身である、との
自負が窺える。

(5) 明治三十四年八月号の「こゝろの華」(第四卷八)の目次
には、「平賀元義集・・・赤木格堂集録」とあり、本文には
「平賀元義集 赤木格堂集録／森田義郎寄」とある。

明治三十四年九月号の「こゝろの華」(第四卷九)の目次
には「平賀元義集・・・赤木格堂集録／森田義郎寄」とあり、
本文には「平賀元義集(完) 赤木格堂集録／森田義郎 寄」
とある。

(6) 元義の歌は格堂が帰省中に二十日間もかけて蒐集したもの
であって、「ほんの取次役を勤めた」のではなかったこと、
元義の歌を子規に紹介した後、子規によって表現されるまで
には五ヶ月もかかり、その間格堂が熱意をもって発表を促す
努力があったわけで、決して発見と同時に易々と公にされた
のではなかったことを主張したかったのである。

(7) 平賀元義の歌人としての評価に、新免一五坊が関わってい
たことを再び特筆している。しかし、この文章からは、コロ
ンブス以前にアメリカを発見した人がいたにもかかわらず、
歴史的にはコロンブスが発見者とされているように、元義の
発見者は実際に行動に移した自分であるとの、格堂の主張が
伝わってくる。

おわりに

詳細な元義発見の経緯の発表された「平賀元義発見譚」には、
格堂自身の履歴等に明らかな誤りが指摘できる。しかし、それ
は小さな瑕瑾であって、「先師の晩年」では不明瞭であった内容、
即ち、当時の「世間に誤伝されて居る」具体的内容と、新免一
五坊が関わっていたことが明らかになった点において、価値あ
る資料といえる。

また、当時の子規と格堂の親密な師弟関係もうかがわれる点
については、子規の晩年に期待をかけられていた格堂の、面目
躍如たるものがある。

二〇〇四年 十月三十一日受付
二〇〇四年十二月二十五日受理